

のであろう。それゆえ、もし正しい思いに「言葉をつけ加える」とは、相違性を思うことではなく相違性を知ることだとすれば、知識とは何かと問われた者は、「相違性の知識を伴った正しい思い」(210a)と答えることになり、私たちは知識を求めて限りない循環に陥ってしまう。したがって以上の三様の言葉が真なる思いに伴っても知識の完全な定義とはなり得ないのである。

「したがって、知識は、感覚でもなければ、真なる思いでもなく、また真なる思いに伴って言葉がつけ加ったものでもないだろう」(210a-1)とソクラテスは言って、テアイテトスとの対話は結論なしに終わってしまう。しかし私たちは、知識の何であるかをこれまでの対話の中から何とか理解しなければならぬ。すなわちテアイテトスが気づかずまた引き出し得なかつた答、ないしはそれへの暗示を読みとらなければならぬ。テアイテトスが答えた三つの知識説には確かにひとつの発展が見られるであろう。感覚より真なる思い、真なる思いよりは言葉を伴った真なる思い、というふうな次第に知識に近づいている、と考えられる。しかしこれらの答えは、いずれもテアイテトスの思いつき、或いは他人から聞いたものであって、テアイテトス自らの魂のうちで孕み、真に自分の子供として生んだものではなかつた。しかるに、この、真の自己自らのものと言える知識、自己自身に最も親しい親らの知識、つまり、本当の知識、とは何であるかの暗示を、ソクラテスが「余談」として語った挿話のうちに、私たちは読みとることができると思う。すなわち、

「悪しきものが減ぶということはあり得ないことです、テオ

ドロス、——というのも善きものには常に反対のものがあるのが必然ですから——、またそれらが神々のもとに座をしめるということもあり得ず、むしろそれらはこの死すべき自然と此の場所とを必然的にとり巻いているのです。それゆえ、できるだけ迅速やく此所から彼所へ逃避すべく努めなければなりません。で、逃避とはできるかぎり神に似ることなのです。そうして似るといふのは知慮をもって正しくかつ敬虔となることなのです。……神は断じて不正なものではなく、むしろ可能なかぎり最も正しいものなのです。そしてわたしたちのうちできるかぎり正しい者となつたひと以上に神に似た者はいないので。このことに人間の真の堪能も無能や臆病も関係しているのです。というのは、このことの知^{グノシス}が真の知恵と徳であり、このことの無^{イグノシス}知が明らかな無学と悪なのですから」(176a-c)。

付記 紙面の都合上、遺憾ながら虚偽論を割愛せざるをえなかつた。

長門の「オンニヨウ(陰陽)」

木場明志

ここに事例としてとりあげる長門(山口県)の「オンニヨウ」と称された人々は、筆者が陰陽師系宗教者の名称で括って考えている民間宗教者の一例であるが、史料採集と実地踏査によって史的的位置づけを試みることを意図する。

近世以来、長門美禰郡伊佐（山口県美禰市伊佐町）に「オンニヨウ」と呼ばれてきた人々があった。『山口問田万歳業之事付り伊佐ノ陰陽之事』（山口県文書館蔵）には標題に「伊佐ノ陰陽」、本文に「徳定村之陰陽」とあり、陰陽五行説の「陰陽」の文字が用いられている。彼らは居住区の徳定の名でも呼ばれ、『民族と歴史』第六巻第四号にも紹介されたが、山口県地方史研究の基礎史料『防長風土注進案』によると、彼らは昔、花山帝が当地の桜山（四五六米）へ登って南原寺を開いた時に供奉した陪臣本間某・内田某の子孫であると伝えている。桜山南原寺の家老職を務め、南原寺の衰退と共に徳定地区に下山して農業と薬業の二業を行ない、当時（天保十二年）では数拾軒が増え、殊に諸国売薬で名が通っていると記している（吉田宰判伊佐村条）。事実、伊佐村の産業を記した箇所には「売薬師三拾軒徳銀拾貳貫目」とあり、これは伊佐村総徳銀の四割強に当たっている。

彼らはまた「伊佐の下医者」とも呼ばれたが、本間氏分流で売薬業者であった山本家所蔵の『系譜風土記写』には、「医業濟世之道并ニ天文陰陽学ノ両道ヲ開始シ民間救助」と、本間・内田両氏が医業と天文陰陽学で民間に活動したことが語られている。この文書には、医師として活躍したこと、そして宝暦元年頃以降より産業化して配置売薬を営むようになったことをも述べている。医業というも、もとは道教の中の典業技術の影響によるところが大きく、また古代以来民間宗教者が同時に民間医療の担い手であった事実も多いのであって、本間・内田両氏がその医業に加えて陰陽術を行なったとすれば、彼らはまさに民間宗教者としての

陰陽師であったと考えて大過はないといえるのである。医者であったというのも、当時の民間医に共通するところの咒医であったと考えられ、咒術を伴う治病を行ないつつ実際の施業を行なったものと考えられる。古く韓国連広足は、修験道開祖役小角に師事したが典業寮の頭となっており（『統日本紀』天武三年条）、ここに民間宗教者と道教技術としての典業知識との古来からの連関を類推し得る。

上記をしっかりとしても、花山帝従者で桜山南原寺家考職であったとする出自には問題が残る。『美禰郡桜山縁起』（山口文書館蔵）をみても南原寺中興者花山院の従者として本間・内田両氏の名を明記しているが、この南原寺は桜山々頂近くに真言寺院として現存する。南原寺は近世宝永二年頃から長門国三十三ヶ所の第十七番札所となり、花山帝自刻と伝える十一面観音像を本尊とする観音霊場であった（『ふるさとの歴史・美禰』）。旧巡礼道には鎮の残る所があり、岩場もあるが、そこには「花山帝と従者本間・内田の像」と地元で呼ぶ三体の石像（天保九年造立）がある。これは実見するところ修験道の祖、役行者と従者前鬼・後鬼の像である。

また南原寺に近い花山法皇陵との伝承地には石造五輪塔を置く基壇があり、周囲に玉垣（天保九年奉獻）を築いている。玉垣は銘によると本間・内田姓を中心とする十九名の徳定地区売薬業者の手で造られており、南原寺旧観音堂鰐口銘（元禄十二年）や現本堂内青銅製灯籠銘にも本間氏の名が寄進者として刻まれている。

役行者・前鬼・後鬼像といい、鎖行場・岩場の存在といい、ここに修験道との関係が考えられてくる。それについては、この美禰市にある大嶺という地名に関して『地下上申』（享保年間）に、「彦山と申岩山有之往古此所に大峯入として山伏群りたる由申伝へ」ていることが注意される。この彦山という山は今もその名のままにあるが、また美禰市北方十五料程の花尾山は、近世には山伏の峯入りが盛んで長門修験道のメッカであったという。美禰の太田村には修験者と考えられる豊後出身の宗教者の墓の話が、そして近くの秋吉村にも山伏の塚の話があつて（共に『防長風土注進案』）、いずれも雨乞に関する伝承を残している。こうした山伏と雨乞の伝承は長門地方に広く散在する南条踊の由来伝承にはかならぬが、山口県内に残存する幾多の神楽は美禰郡を中心としていて山伏系神楽であるという（『防長神楽の研究』）ことも留意される。

また花山帝については、熊野那智へ参籠したとか、あるいは西国三十三ヶ所巡礼を創始したという行者的性格を示す伝説が往々伴っており、こうした花山帝にまつわる伝説は一般的に、熊野系山伏の徘徊した地に多く残されている。単なる花山帝開創（または中興）伝説だけでなく、ここの事例では「オンニヨウ」の人々の祖先がその従者であつたという話となつてゐるが、これは漂泊遊行の民間宗教者がその出自を貴人皇家に結びつけて語ることによつて、自分達の権威と誇りを維持しようとした普遍的現象の一つの顕われであらう。

以上の如くして導かれることがらは、地方修験霊場の一つとし

て（九州彦山系か。彦山は熊野の組織をうつして組織化されたもの）、花山帝開創伝説をもつ桜山南原寺が開かれ、山伏その他の漂泊遊行宗教者の往来をみ、近世中期以降にそのうちのある者（本間・内田姓の者）が定着居住した結果として、徳定地区「オンニヨウ」が成立したのであらうとすることである。つまり、医薬製造技術と天文陰陽術を有した山伏の陰陽師的漂泊宗教者が、その出自を花山帝に結んで南原寺の辺りに定着し、呪術的宗教的機能を漸々薄めながら配置売薬の許可を萩藩より獲得し、遂には「伊佐売薬」として富山売薬と競うほどまでに産業化への道をたどつたということであらう。南原寺への寄進を怠らなかつたと、伝花山陵玉垣の奉加、役君・前鬼・後鬼像を花山帝および彼らの祖としたこと。それらを示す金石史料がこの解釈を傍証するのである。

彼らが修験者的でありながら「オンニヨウ（陰陽）」の名をもつて称されたことは、先掲『系譜風土記写』に自ら陰陽術を行なつたと記し、また売薬師呂沢家文書『御尋ニ付申上候事控』（宝暦十年）に、「元来万歳ニ而御座候」と、下級陰陽師が祭文を読んだことから転じて職能化したものである万歳を行なつた形跡があるところから肯んずることができる。すなわち、長門の「オンニヨウ（陰陽）」は、修験道的一端を担いながらも陰陽師であつた民間宗教者の一群といつてよからうと思ふ。九州彦山系の修験道文化に付随して発生発展した陰陽師系宗教者であらう。